二〇一八年五月二八日（参加者一五名）

薫風や裏参道の築地塀　うつぎ
若葉風数奇屋づくりの四阿に　うつぎ
一望のまほろば二月堂涼し　うつぎ
鋏の音天より降らし松手入　うつぎ
霊水として一条の瀧涼し　せいじ
出格子の古町をゆく白日傘　せいじ
銀輪に初夏の日差しや人力車　せいじ
鐘楼の鐘は泰然青嵐　せいじ
鹿の仔の見開くまなこ緑映ゆ　たか子
薄暑光原始の森の谷間へと　たか子
夏の森自縄自縛に蔓からむ　たか子
天井は網代作りや亭涼し　菜々
南大門大万緑を抽んでし　菜々
滴りて岩場の苔を潤しぬ　菜々
松手入梯子見ゆれど足見えず　ぽんこ
青空の展けそめたり松手入　ぽんこ
大鳥居くぐる一歩や万緑理　満天
下闇に昼を灯すは荷茶屋　満天
薫風や古都一望の高欄に　わかば
塔頭の長き築地や古都薄暑　わかば
急磴の灼くる手すりに難儀して　明日香
ドンタッチ袋角への注意飛ぶ　こすもす
戦意なき瞳に安堵袋角　小袖
鹿とゆく春日大社の杜涼し　はく子
四阿にひと息つけば若葉風　はるよ
鹿に飽き歩き疲れて氷菓舐む　宏虎
杜涼し木立がくれに鹿の角　よう子

吟行句会みのる選

二〇一八年五月二八日（参加者一三名）